

# 身体障害児の教育的リハビリテーションに与える

## 家庭のストレス (2)

— 研究の指針を探って —

### An Effect of Family Stress on Special Education (2)

橋本 厚生

Atsuo Hashimoto

#### はじめに

前回の報告<sup>(1)</sup>の中で、家庭のストレスとその児童の教育的達成度との関連を見たが、その場合、両者の間に入る何か媒介要因なり変数なりを考えるべきであると述べた。今回は、仮りに児童の「社会的自立意識」と「障害の受容度」及び「障害の重症度」を入れて分析してみた。さらに、「媒介変数」、「家庭のストレス」、「教育的達成度」の三者間のモデルを作るべく、仮説的にモデルを作成してみた。さらに他の報告<sup>(3)</sup>から得られた指針をもとに、同じデータを再分析して、「障害診断前家庭要因」をいくつか想定して、仮設モデルに入れてみた。この仮設的モデルに、数年前の調査結果<sup>(3)</sup>のいくつかから得られる指針を加えて、総合的なモデルを考えてみた。

#### I 調査の対象、方法、内容

<sup>(1)</sup>  
前回の報告と同じである。

#### II 分析結果

##### (1) 家庭ストレス、媒介変数、教育的達成度間の関係

図2は、家庭の各ストレス因子と三個の媒介変数及び三個の教育的達成度の間の関係を示している。数値は、平均値の相違を示すt検定結果の有意水準 ( $P < .$ ) と相関係数 ( $R = .$ ) である。相関係数は、一部を除き、重回帰分析を行った際に出力される係数を利用しているので、粗点から

分析されていない。数値を変換しているためか、相対的に小さい数値になっている。この調査の分析結果の中では、 $R = 0.2$ 位でも大きい方になっているので、およそ0.2ぐらいの数値も示しておいた。有意水準や相関係数が示されていない所は、明確な関係が出なかった所であるので省略した。概して、明確に仮説が支持されているとは言えない。つまり「合計ストレス」と「教育的達成度」が、今回のデータでは大きな関係を示していない。もう一步という感じである。さらに、「媒介変数」と「合計ストレス」に関係が見られず、やはり今回のデータではもう一步という感じであった。しかし、個々の構成要素では、部分的に関係を示しており、また今までの他の分析ではかなり関係を示す場合もあり、仮説をすてるには早計であろう。「媒介変数」と「教育的達成度」はかなりの関係を示した。ただし、「障害の重症度」が今までほど大きな影響を各変数に与えていない。なお、一部しか示していないが、各ストレスを独立変数として、各媒介変数及び各教育的達成度を従属変数として重回帰分析を行ったが(表1、表2、表3、表4、表5)、「社会的自立意識」と「障害の受容度」に対しては、前者は「外部対人ストレス」と「合計ストレス」が一番よく説明し、後者についても同じ結果であった。しかし、両者とも、標準化回帰係数(BETA)は0.12と0.16で小さく、また重相関係数( $R^2$ )も小さく、ストレスは各媒介変数を説明しているとは言えない。しかし、各教育的達成度については、それぞれおよそ0.5から0.58の標準化回帰係数を「合計ストレス」が示しており、「外部対人ストレス」と「内

部役割ストレス」もある程度その値を示している。 レスは教育的達成度を説明している。 重相関係数は大きいので0.17で、ある程度はスト

図2 ストレスと教育的達成度の仮説的媒介変数の検証

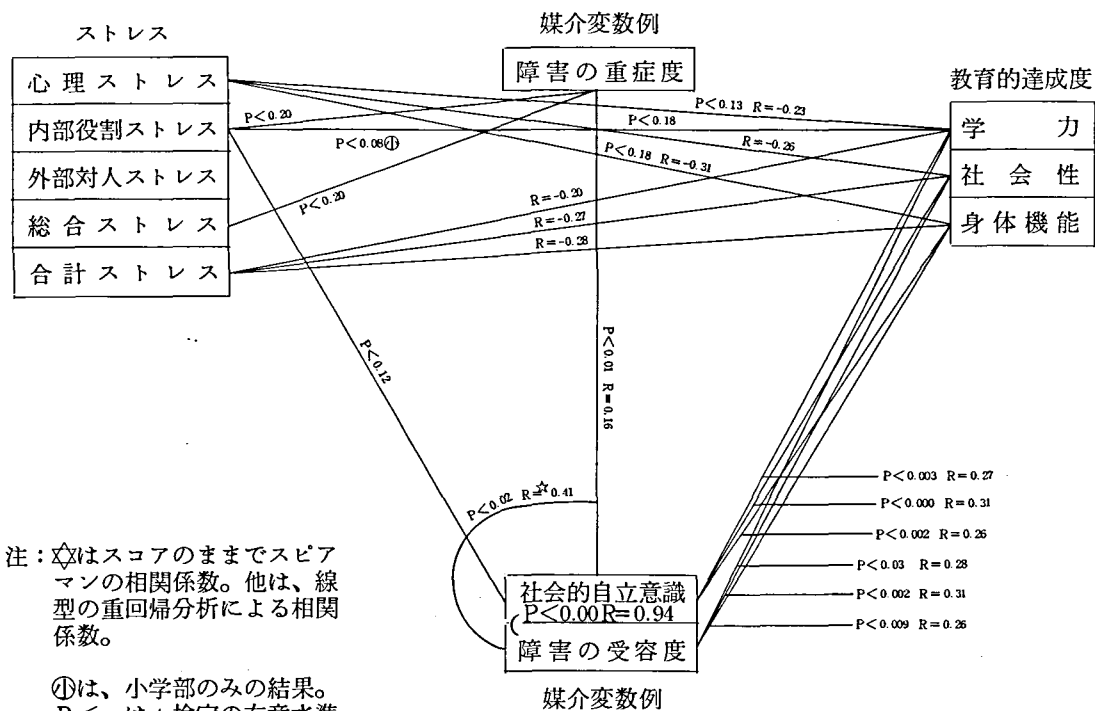


表1 重回帰分析の結果

変数名	「障害の受容度」		
	R <sup>2</sup> 重相関係数	単純相関 R	標準化回帰係数 BETA
心理ストレス	0.003	-0.058	-0.051
内部役割ストレス	0.008	0.027	0.097
外部対人ストレス	0.025	0.119	0.166
総合ストレス	0.025	0.024	0.049
合計ストレス	0.030	-0.020	-0.169

表2 重回帰分析の結果

変数名	「社会的自立意識」		
	R <sup>2</sup> 重相関係数	単純相関 R	標準化回帰係数 BETA
心理ストレス	0.002	-0.054	-0.026
内部役割ストレス	0.002	-0.028	-0.001
外部対人ストレス	0.014	0.079	0.129
総合ストレス	0.016	0.033	0.073
合計ストレス	0.018	-0.037	-0.123

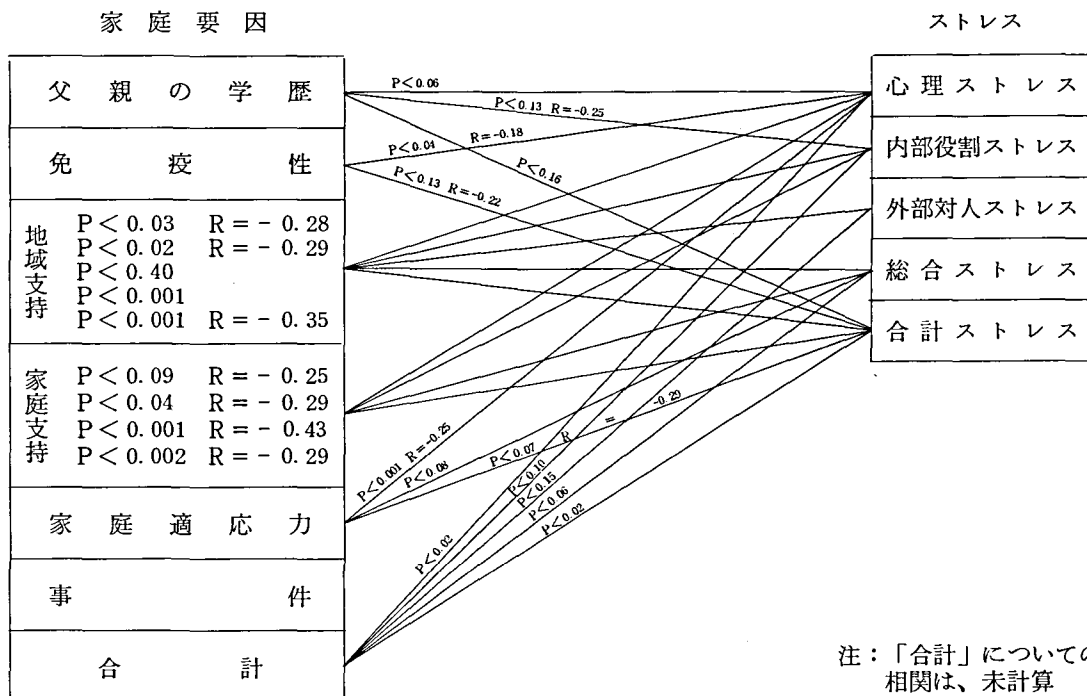
## 〔2〕 障害の診断前家庭要因とストレスとの関係

今回の分析のもうひとつの目的は、ストレスが発生する以前の家庭が持っている属性がその後のストレスの状況の要因にどう影響しているかを検討することであった。つまり、今までストレスを規定する各種要因については、主にストレス発生後あるいはストレスと同時に有する要因に視点を置いていたが、ストレスとは、すでに過去のストレスとの累積になっていること、そして「もともと」有している何らかの属性がすでに影響していることを考えなければならない。

図3は、障害発生すなわち障害と診断される前の家庭の要因をいくつか想定して、ストレスの関係を示している。各要因は、すでに分析済みの結果を参考に、再度分析し直している。これらの要因はYOAV LAVEEらの研究を参考に作成した。<sup>(4)</sup>「父親の学歴」は小学校卒業から大学卒業までを4段階に分けてスコアとした。この要因は、「社会

一経済的地位」という指標の代りである。調査時にこの指標は準備していなかったこと及び「過去」のこの指標を「現在」で聞く難しさがあること、さらに日本においては、年齢層で同質的（特に収入については）ではないかということを考えなければならない。要は、その家庭がすでに持っている文化的な背景を知ればよいのであるから、もっともよくそれを表わすには「学歴」でかなり代表されよう。「免疫性」は、以前において、ストレスと同時の状況で分析しているが、今回はストレス以前に限定し、内容も少し変えて準備した。これは、障害の意味や原因について知っていたか、及び友人、親類に障害を有している人間がいるかについての質問からスコアをつけている。「地域支持」は、人づき合い、PTAや地域活動の協力などにもともと家庭は積極的に行うほうかについての質問から得られている。「家庭支持」は、コミュニケーションを中心に、家庭内の相互協力関係がもともとあったかどうかを見ている。

図3 ストレスと障害診断前の仮説的家庭要因の検証



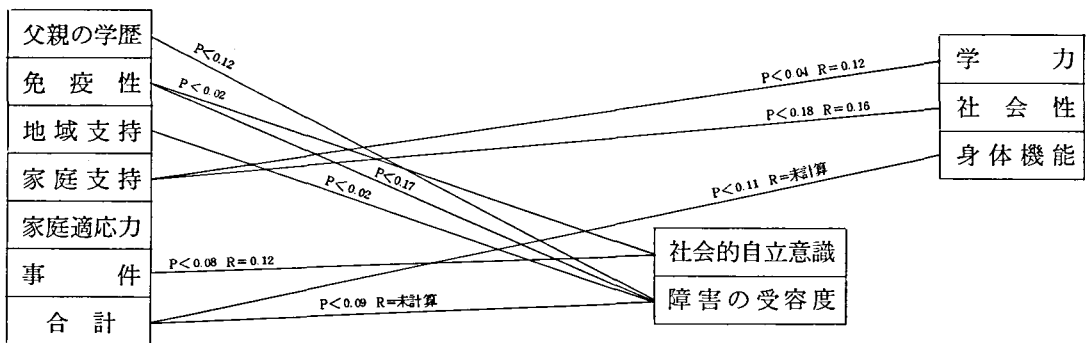
「家庭適応力」は、たぶんパーソナリティに関して、もともと、新しいものを受け入れるほうか、あるいは、もともと変化を受け入れるほうかなどの質問から見ている。「地域支持」と「家庭適応力」は、母親が回答者であるので、かなり母親中心の状況を示し、家庭全体の状況を示しているとは限らないと思われる。「事件」とは、過去に大きな事件（事業の失敗・家族の死亡・転居など）の解決程度を聞いているが、この回答は非常に少くスコアに大きく影響していない。ここでは、結婚が理想的であったか失敗であったかの程度でスコアが得られている。「合計」はこれらの要因の合計で、ストレスに、ストレス以前の何らかの要因が影響している程度を知るためのものである。これら6個の要因間の調整（独立性など）は今回はしていない。家庭要因の「合計」は、各ストレスに平均値の差を示している。各要因も比較的ストレスに差を示している。ここでは一部しか示していないが今回は、合計を除いて、重回帰分析を行っているが（表6）、特に高い標準化係数を示すのが「家庭支持」で、「総合ストレス」

に0.39を示している。重相関係数は4個の家庭要因で「総合ストレス」に0.22を示している。図3の相関でも $R = -0.43$ 及び $-0.35$ と高くなっているのは、「地域支持」と「家庭支持」の要因である。「父親の学歴」がかなり平均値の差を示しているのは、それがかなり間接的な要因であることを考えると、非常に注目すべきである。

### ③ 家庭要因と媒介変数及び教育的達成度との関係

ここでは、これら三者が高い関係を示さないことが仮説として必要である。図4を見ると、全体としては、数的にも量的にもそれ程大きい関係は示していない。「地域支持」と「家庭支持」が障害児の「教育的達成度」や「意識」面に直接関係することは、ある程度予想していた。従って、「合計」の要因も、結果的には、ある程度関係を示すと予想していた。全体の仮説としては、これら要因が「ストレス」に影響し、「ストレス」が「媒介変数」と部分的に重複しながら「教育的達成度」に関連することを想定している。

図4 教育的達成度、媒介変数と障害診断前の仮説的家庭要因の検証



### III 考察

図2において、仮説としての「媒介変数」が内容的に「教育的達成度」と共通していることが推測できる。媒介変数の持つ児童の意識面が「学力」や「社会性」の要素と重複している部分があったのであろう。予想していた程、各ストレスは「教

育的達成度」に関連していない。特にストレスの「合計」は、その傾向を示しているが、統計的には明確に表われなかった。しかし、これら三者の関係がないという程ではない。今までの類似の調査では、前述したようにかなりの関係を示していた。今回の結果では、「ストレス」と「教育的達成度」間に関係が出る傾向が認められ、両者の間

に、「媒介変数」も関与する傾向が認められる、  
という表現に止めておく。

表3 重回帰分析の結果

「学  
属  
変  
数  
名」

変 数 名	R <sup>2</sup> 重 相 関 係 数	R 単 純 相 関	標準化回帰係数 BETA
心 理 ス ト レ ス	0.053	-0.230	-0.044
内 部 役 割 ス ト レ ス	0.057	-0.071	0.245
外 部 対 人 ス ト レ ス	0.073	0.054	0.200
総 合 ス ト レ ス	0.077	0.009	0.196
合 計 ス ト レ ス	0.126	-0.208	-0.580

第4 重回帰分析の結果

「社  
会  
性  
変  
数  
名」

変 数 名	R <sup>2</sup> 重 相 関 係 数	R 単 純 相 関	標準化回帰係数 BETA
心 理 ス ト レ ス	0.069	-0.264	-0.028
内 部 役 割 ス ト レ ス	0.070	-0.156	0.139
外 部 対 人 ス ト レ ス	0.112	0.088	0.296
総 合 ス ト レ ス	0.112	-0.070	0.122
合 計 ス ト レ ス	0.160	-0.271	-0.580

図3では、およそ予想通りであった。累積したストレスの部分は、ストレス全体から言えば、それ程多くはないという予想は立てていた。重相関係数から言えば、およそ20%の分散を説明していると言えよう。数年前の報告<sup>(3)</sup>では、ストレスと同時の状態も含め、「家庭の結束力」と「母親のパーソナリティ」がストレスを規定する大きな要因となって表われたが、今回の「地域支持」「家庭支持」及び「家庭適応力」のストレスへの影響の大きさは、この傾向と一致していると考えられる。今回は、特に障害診断以前を強調した質問であったが、結果的には同じような傾向を示している。「パーソナリティ」と「家庭要因」が障害もしくは危機発生後と大きくは変化しないと考えるべきなのか、あるいは、質問による調査の限界が現われているのか、さらに検討を要する。「父親の学歴」が各ストレスに与える影響は、「媒介変数」に対してと同様かなり大きいことは重要である。どうしても家庭の有する文化的背景あるいは価値観さらには態度や考え方が児童に与える影響は大きい。図7はJEANNE M・TSCHANNらの離婚後の適応程度

に与える離婚前の要因を示している。ここでは、「社会・経済的地位 (SES)」が直接「適応」に影響を示している。もちろん、「社会・経済的地位」が「父親の学歴」と同一ではないが、特に日本では重複している部分はかなり大きいと確信する。

図4では、三者の関係が数的にも量的にもあまり大きく現われないことが仮説であったが、またそうでないと全体モデルの構築は意味がないのであるが、しかし、部分的に関係を示すことは予想していた。図6をみると「家庭支持」に相当する「Supportive Communication」と「Family Cohesion」は直接「Family Adaptation」に影響を与えている。またその数値は他の数値に比べそれ程大きくはない。同様に、今回の報告の「家庭支持」は、直接二つの「教育達成度」にP<0.04、R=0.12、P<0.18、R=0.16で関係を示した。予想では、「父親の学歴」も同じ結果を示すと思っていたが、大きな数値は示さなかった。しかし、「媒介変数」にこれだけの関係を示していることは、無視できず、モデルとしては、この二者の関係は入れざるを得ない。

図5 仮説的、概念図的モデル

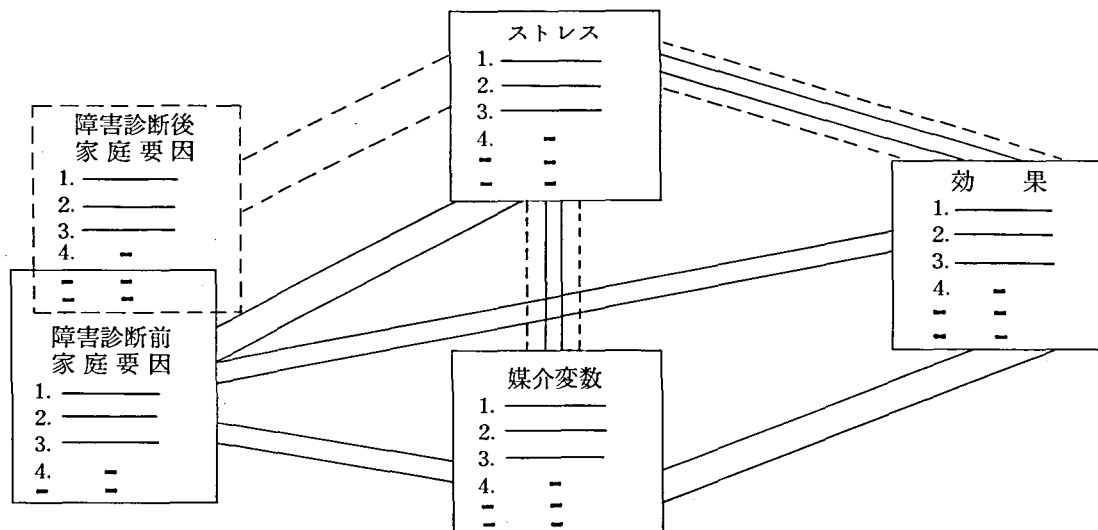


表5 重回帰分析の結果

変 数 名	「身体機能」 「従属変数名」		
	R <sup>2</sup> 重相関係数	R 単純相関	標準化回帰係数 BETA
心理ストレス	0.099	-0.315	-0.128
内部役割ストレス	0.099	-0.168	0.129
外部対人ストレス	0.133	0.059	0.261
総合ストレス	0.134	-0.058	0.141
合計ストレス	0.171	-0.288	-0.503

表6 重回帰分析の結果

変 数 名	「総合ストレス」 「従属変数名」		
	R <sup>2</sup> 重相関係数	R 単純相関	標準化回帰係数 BETA
父親の学歴	0.014	-0.122	-0.100
免疫性	0.016	-0.025	0.046
地域支持	0.051	-0.187	-0.014
家庭支持	0.199	-0.433	-0.399
家庭適応力	0.229	-0.222	-0.190
事件	0.229	0.014	-0.013

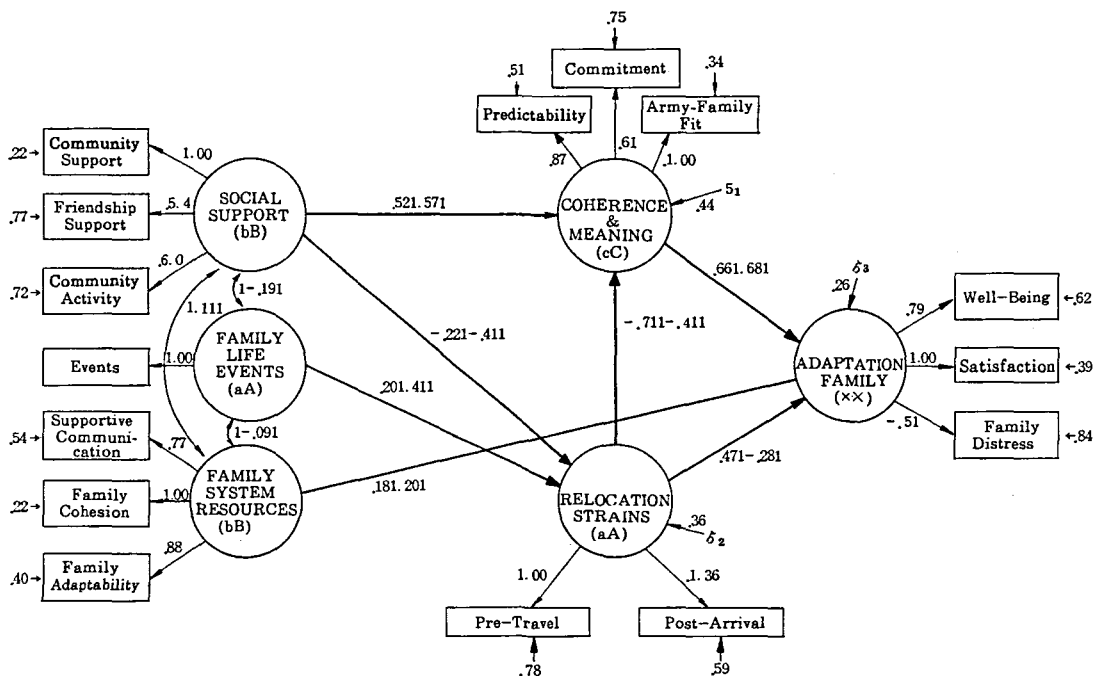
障害の診断前の家庭要因として「事件」を考えなければならない。この要因のほとんどは結婚の状況（結婚したことについて）を示している。今回の分析では、この要因をもっとも重視して、期待していた。家庭の状況は、何よりも夫婦間の関係に大きく依存していると考えられるからである。ストレス状況下では、しばしばこの結婚そのものに

「さかのぼって」問題が展開し、また拡大していく。今回のあまり関係していない理由（場合によっては逆の関係、例えば、理想的でなかった程、ストレスが小さくなる）は、いくつか考えられる。例えば、印象であるが「抵抗」という複雑な心理メカニズムも考えられる。しかし、これについては、別個に調査をする必要がある。図6では、

「event」は1個で独自に「精神的な緊張度」に影響を与えているが、これに相当する「事件」は、内容が部分的に一致するだけである。今回の「事件」のうち、事故・死亡・失職といった事件は大

きく影響していない。またYOAV LAVEEらの場合、軍人家庭の海外移住に関するストレスと関連要因の研究であるので、この点も考慮すべきである。

図6 YOAV LAVEEらのモデル



Note: Unstandardized coefficients shown. Parenthetical figures denote standardized path coefficients. All path coefficients are significant ( $P < .05$ ).

図5は、今回の分析と今までの報告から考え出したモデルであり、今後の研究の方針でもある。点線による図は、今回の結果によるものではなく、今までの経験から得られている。線の幅は強さを示す。「ストレス」から出ている幅のせまい線は今回の結果であるが、点線の幅の広い線は経験からえがいているが、筆者の期待でもあるし、モデルの中心でもある。点線に囲まれた「障害診断後家庭要因」と実線で囲まれた「障害診断前家庭要因」が重なっているのは、前述したように、この二分野の要因群が重複していると考えられるからである。

#### IV 結論

「媒介変数」は、「独立変数」のストレスとある程度を示し、「従属変数」の教育的達成度と強い関係を示し、この二つの関係は、「独立変数」のストレスと「従属変数」の教育的達成度

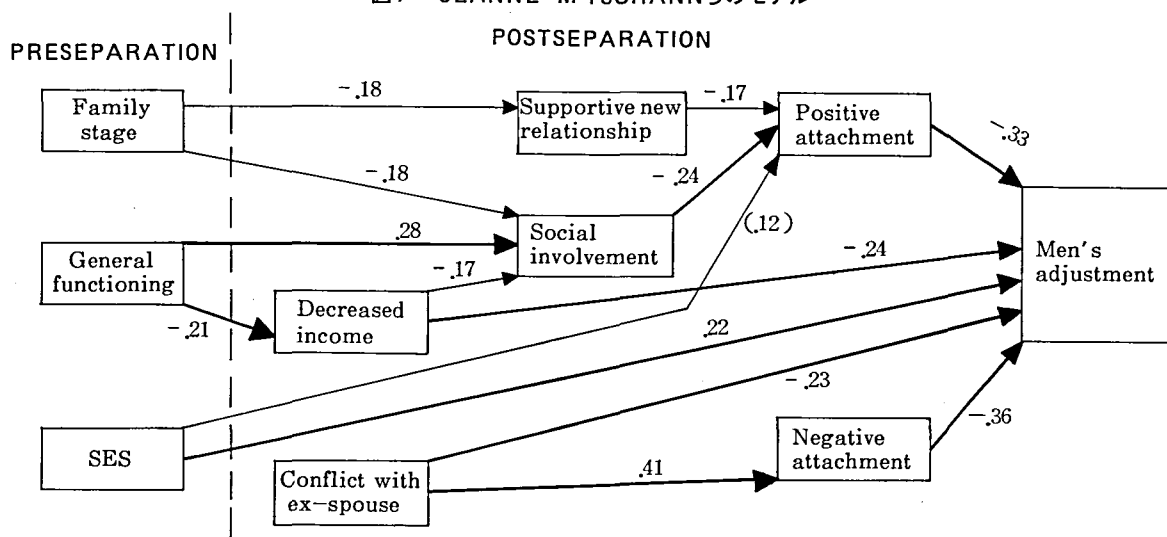
間のある程度を媒介的にある程度示している。これら「ある程度」とは、各変数もしくは要因間の重複による結果と、他の研究の結果による明らかな関係という二つの事実にはさまれ、やむを得ず使用した表現である。「障害診断前要因」すなわち危機前の家庭要因が、「障害診断後」すなわち危機状況及び効果（もしくは適応）に影響していることが分った。また、これは、ストレスと同時進行すなわち危機状態の家庭の要因よりもその影響力は小さいだろうという予想は確かめられた。しかし、「父親の学歴」と「結婚」の要因は、今後さらに注意を要することが分った。

とりあえず、図5のモデルで研究を進める価値は十分にあると思われる。

分析は、SPSSプログラムを利用し、筑波大学大型計算機を使用した。

(1990. 6. 18 受理)

図7 JEANNE M-TSCHANNらのモデル



Note: Model shows standardized path coefficients from reanalysis with only significant Predictors included in the regression. Heavier paths denote significance  $< .01$ .

### 参考文献

- 橋本厚生 「身体障害児の教育的リハビリテーションに与える家庭のストレス……(1)」  
1990年 長野大学紀要
- 橋本厚生 「障害児をかかえる家庭のストレスに与える障害診断前の家庭要因の影響」  
1990年日本特殊教育学会第28回大会  
発表論文
- 橋本厚生 長野大学紀要1982年より1983年の発表論文参照
- YOAV LAVEE 他  
「The Double ABCXMODEL of Family Stress and Adaptation: An Empirical Test by Analysis of Structural Equation with Latent Variables」1985年 Journal of Marriage And The Family P811 ~P825
- JEANNE M. TSCHANN 他  
「Resources, Stressors, and Attachment as Predictors of Adult Adjustment After Divorce: A Longitudinal Study」1989年 Journal of Marriage And The Family P1033 ~ P1046